

土地利用型農業の法人経営で発展中 ～地域の農地の担い手としての役割を果たす！～

豊田市 鈴木喜一郎さん

水稻・小麦・大豆

【平成 29 年 1 月 20 日掲載】

豊田市中西部で水稻・小麦・大豆の栽培を行っている農事組合法人逢妻において、地域の課題と真摯に向き合いながら農業を営む鈴木喜一郎さんをご紹介します。

J A 職員から転職

鈴木さんは、前職が J A あいち豊田の職員であり、豊田営農センターの営農指導員として勤務していた平成 10 年に、農事組合法人逢妻（以下「逢妻」という。）の設立に携わりました。逢妻は、地域の耕作放棄地を減らし、農地の担い手となることを設立意義とし、豊田営農センター管内で、高齢化等により耕作ができなくなった農地を J A を介して受託しています。平成 17 年頃、鈴木さんがセンター長として在籍した時にも、受委託の取りまとめや調整役として逢妻に関わるうちに、地域に貢献しながら自分の働きがそのまま結果に出る逢妻の仕事に魅力を感じ、平成 19 年、45 歳のときに転職しました。



鈴木喜一郎さん

逢妻の経営概要

逢妻が主に受託する豊田市中西部は、東名高速道路や幹線道路に囲まれ、自動車関連工場が多く、市街地も含んだ地域で、生産性の低い農地が多く存在します。法人設立当初は、小規模な農地が点在し経営が大変だったそうです。その後、経営面積が徐々に増え、ばらばらだった農地がある程度まとまってきました。現在、設立から 18 年が経ち、経営面積は約 150ha、3 年前から代表理事となった鈴木さんを始め組合員 6 名、従業員 4 名、その他アルバイト等で運営しています。平均年齢が約 40 歳の若い組織で、組合員は働いた分が給与に反映され、やりがいを持てる従事分量配当の仕組みとなっています。

逢妻の栽培体系

逢妻では、経営面積のうち約 6 割は水稻、約 4 割は小麦・大豆を栽培し、2 年 3 作の輪作体系となっています。3 品目の作付割合が収益に直結するため、理事会で決定する作付計画には大変気を遣うとのことでした。水稻は、単収が安定していますが、作付けから収穫までの間の作業が多いため面積を増やすことは容易では無く、また、米価が安い年が続いたため、飼料用米の作付けを増やすことで



今年大豆はまずまずの出来栄のこと

収益低下を回避しています。小麦は、作付けから収穫までの間の作業は少ないのですが、逢妻が管理している農地には排水の悪いほ場が多く、小麦の栽培は容易ではありません。大豆は、播種時期が梅雨にあたり、雨が多い年には発芽不良となり、単収が極端に低下します。また、収穫に専用機が必要で、面積が多いと収穫が間に合わないため、作付面積が限られます。これらの各品目の事情を踏まえ、現在は、小麦の単収アップに重点的に取り組んでいます。過湿への適性が高い、県育成品種「きぬあかり」を導入するとともに、ほ場の排水性を向上させるため、播種前の耕起やサブソイラの施工をしっかりと行い、土壌改良剤や堆肥の施用による土づくりにも取り組んでいます。「米も小麦も大豆も、播種して収穫するという作業は一緒。いかに単収をあげるかを念頭に、作付割合を決めている」とのことでした。

現場における合議で決定

ほ場の管理では、代表理事である鈴木さんがその日に集中して作業するエリアを決め、2名1組となって作業をします。ベテラン組合員から若手従業員が学べる体制であるとともに、全員が近くのほ場で作業を行うため、日々の作業における判断は現場において合議で決定しています。「現在の10人ぐらいの規模が運営しやすい。これ以上多くなると一人一人の声が聞こえにくくなる」と話す鈴木さん。組合員や従業員の声をできるだけ聞くよう日々心がけているそうです。



従業員とコミュニケーションを取りながら作業する様子

地域の農地の担い手としての悩みと今後の事業展開

豊田市中西部ではJAに委託する農地が年々増えており、逢妻の受託面積は毎年約10haずつ増えています。前述のように、逢妻を設立した意義が地域の農地の担い手となることであり、JAとの関係が密接であることから、経営面積は今後も増加していく見込みです。それに合わせて従業員やアルバイトを増やす必要があり、鈴木さんの「組合員や従業員の声が届く組織でありたい」という思いから離れてしまいます。今後の組織運営が課題となっています。

また、逢妻が農地の担い手として働く一方で、地域に担い手が育っていないことを危惧しています。周囲を見回すと、生産性の高い農地は逢妻や中核となる経営体が作付けしていますが、生産性の低い農地は耕作放棄地となりがちです。他の新しい担い手が現れる可能性も低く、既存の法人に就職する以外には担い手が育たないと言っても過言ではありません。地域を包括的に見た際に、果たしてこれで農地を維持していけるのか、不安はぬぐえないと言います。

地域の課題と真摯に向き合っている逢妻。このような中で、まだ具体的にはなっていませんが、現在の土地利用型の部門に加え、観光農園ができないかと組合員の間で話題に上っているそうです。「イチゴ狩り園ができると楽しいだろうなと考えている。担い手としての役割を果たすことも重要だけど、やっぱり仕事は楽しくて夢のあるものでなきゃ」と経営の多角化にも意欲を見せていました。地域とともに発展していく逢妻の今後の活動が楽しみです。



逢妻川流域に広がる農地

執筆：農業経営課

取材協力：豊田加茂農林水産事務所農業改良普及課